

## 特別寄稿

## 万田さんについて私が知っている二、三の事柄

篠崎 誠

しのぎ まこと

立教大学 現代心理学部映像身体学科教授 映画監督

万田さんとお会いしてからまもなく40年の歳月がたつ。最初にお会いしたのは（お見かけしたというほう正確だが）私が大学1年生の時だ。立教大学文学部心理学科<sup>1</sup>に在籍しながら、私は中学時代からはじめたアマチュア映画づくりを大学でも続けるつもりでいた。

当時立教には、映画研究会、セント・ポールズ・プロダクション（以下SPPと略す）、アーツコープという映画サークルがあり、その中でもSPPは、黒沢清さんを輩出したサークルとして有名だった。大学公認サークルではあったが、部室はなく、池袋キャンパス5号館地下に、トイレを挟んで第二食堂と隣接したコモン・ルームという広い空間があり、複数のサークルの溜まり場だった。壁にサークル名が貼られていて、その前に各サークル用に長テーブルが1つか2つ、椅子が10脚ほど用意されているだけの雑然とした場所だった。

5号館の1階から地下に向かう階段を降りると、踊り場があり、一方は第二学食へ、反対側はコモン・ルームに下りられるようになっている。そこから食堂やコモン・ルーム全体が一望できた。

新入生勧誘などが一息ついた頃を見計らい、私は意を決しコモン・ルームに向かった。踊り場からSPPのテーブルが見えた。長テーブルに、全身黒ずくめの男性が3人並んで座っていた。室内なのになぜか全員がサングラスをかけ、会話を交わすのでもなく、煙草を燻らせていた<sup>2</sup>。まるでベルトルッチの映画から抜け

1 1982年当時、現代心理学部は存在せず、心理学科は文学部に属していた。

2 当時コモン・ルーム内に灰皿もあり喫煙も出来た。

出たファシストたちのように見えた(失礼!)。その雰囲気にもまれた。気づかれないように、ゆっくりと後退り、回れ右して帰った。そのうちの一人が万田さんだった。今考えれば、撮影中の映画の衣装のまま休んでいただけなのかも知れない。

それでもどうしても、2年生になってSPPの門戸を叩く気になったのは、蓮實重彦さんが担当されていた「映画表現論」の授業で見た2本の8ミリ映画に心揺さぶられたからだ。塩田明彦さんが監督した『優しい娘』と『ファララ』。前者では万田さんは主要登場人物の一人を演じられていて、後者では撮影を担当されている。この撮影が本当に素晴らしくて、8ミリ映画でこんなショットが撮れるのかと驚嘆したことを昨日のことに覚えている。こういう映画をつくっている先輩たちのサークルに自分も入って切磋琢磨したい。欲望が恐れに勝った。

再び万田さんと接近遭遇したのは、黒沢清監督の『女子大生 恥ずかしゼミナール』の撮影現場だ。場所は、初台の工業試験場跡(現・東京オペラシティ)。伊丹十三さん扮する大学教授と洞口依子さん扮するヒロイン、その同級生役の麻生うさぎさんの出演シーンにエキストラ参加した。万田さんは忙しく動き廻り、私たちに指示をだし、撮影の準備をしているのを遠巻きに見るだけで話しかける余裕はなかった。

次にお会いしたのは、2年からSPPに途中入部して最初に8ミリ映画を撮った時のことだ。授業中で人気のない時間帯を選び、池袋キャンパス5号館の渡り廊下の窓から外に出て作業していると、視線を感じた。振り向くが渡り廊下には誰もいない。おかしい。今度は校舎を見上げると、屋上から数人の学生が私たちの撮影を見学しているではないか。よく見るとSPPの同級生部員たちで、隣に万田さんもいた。眼と眼があった。万田さんはニコッと笑うとサッと身を翻して消えた。後日、万田さんも自分の8ミリ映画『逃走の線を引け』を撮影していたことが分かった。

1年後、ついに万田さんと話す機会を得た。大学3年の上映会で初めて自分が撮った映画を万田さんに見てもらったのだ。あの時に撮影していたものとは別の映画だ。疫病のように自死が連鎖し広がっていくさまを描いた映画だ。映画の冒頭。キャンパス内のごく日常の空間で、主人公の学生二人が会話していて、彼ら

の背後の窓に身を投げた人影が横切る場面がある。等身大の人形を作り、当初は長回しの後半でその人形を落とす段取りだったが、カメラも自分が兼任していて、どうしてもうまくいきそうになく、日和ってカットを割ることにした。SPPでは、慣例として監督をしたものは、上映会后に先輩たちのいるテーブルを回って感想を聞くのが習わしだった。私も怖々万田さんの前に座った。

緊張しながら固唾を飲む。開口一番。「冒頭ね、あれはカット割らない方が良かったんじゃない？ 6カット目でガッカリしたんだよなあ。凶星だった。完全に見透かされていた。他にも中盤の丘の上のオーバーラップの使い方など、具体的にダメだしされた。万田さんの言葉は明快そのもので、いつもズバリと核心をつく。

「そう言えば、前に5号館で撮影していたよね。面白そうだったけど、あれは見れないの?」。やはり見られていた。冷や汗が出た。その後も、しばらく話をしたが、そのなかで未だに心に残っている万田さんの言葉がある。

「篠崎はさあ、いろんな映画を見ていて、ひとつひとつのシーンの撮り方なんかはちゃんと考えて撮っていて、ところどころ映画のだなあと感じる瞬間があるけど、何でこんな風に映画になりにくい題材を選ぶんだろう。もっとシンプルな物語には興味はないの?」

あれから40年近く、この言葉を折に触れて思い出し、噛みしめている。

以来、万田さんと少しずつお話するようになったが、親しくお付き合いさせていただくようになったのは、大学を卒業してからだ。私は卒業後、道玄坂にあったシネセゾン渋谷という単館系の映画館で働く傍ら、塩田明彦さんの自主制作映画のお手伝いをし(『江の島物語』というその16ミリ映画は残念ながら完成しなかった。それはまた別の話)、早稲田、立教、法政の映画好きたちが集まってつくった「映画王」という批評同人誌に文章を書いたことがきっかけで映画批評に手を染めるようになり、自主上映会を主催した。

忘れ難いのが池袋西武内にあったフリー・スペース、スタジオ200で行った「映画の王道上映会」なるイベントだ。立教出身の周防正行さんの監督デビュー作『変態家族 兄貴の嫁さん』、同じく黒沢清監督の商業デビュー作『神田川淫乱戦争』に加えて、詩人の稲川方人さん、映画評論家の宇田川幸洋さんらの16ミリ映画、西山洋一さん、高橋洋さん、島田元さん、井川耕一郎さんらの8ミリ映画を

集めて上映し、2日間で600人近く動員した。その際、過去作だけではなく、新作もということで、どうした流れでそうなったのかはもう詳細は忘れてしまったのだが、私と万田さんが撮ることになった。私は『留守番ビデオ』というオリジナルの短編映画を撮ったのだが、撮影場所は当時万田さんが住んでいた下赤塚のメゾネット・タイプの家で、2日間に渡って、1階部分を全て借り切り、万田さんご夫婦には、撮影が終わるまで2階で息を潜めて過ごしてもらうことになった。今考えるとなんとご迷惑をおかけしたことが。

そして、当の万田さんはカフカの『アメリカ』を原作に、『大回転』という短編映画をつくった。後年、同じ原作をもとに作られたストロープ＝ユイレの『アメリカ』<sup>3</sup>が日本でも劇場公開されたのだが、見て驚愕。都会から出てきた主人公が鞆を盗まれるシーンが万田さんの短編とほぼ同じショットの連鎖からなっていたからだ(万田さんがつくった時点では『アメリカ』は日本未公開で万田さんは同作を見ていない)。いや、その前後のショットからショットへの飛躍、運動は、万田さんの映画の方が鮮やかと言ってもいいくらいだ。実はこちらの映画には、私もチラッと出演しているのだが、現場での万田さんの演出は、これまた実に明快。その後も万田さんが監督したビデオ映画『ギリギリまで愛して』や『接吻』にエキストラ出演したが、万田さんの指示はいつもの的確で、曖昧さがない。基本的には、立ち位置や動きしか指示されないのだが、時に演じる俳優によっては、求められれば心情的なことを説明されることもあった<sup>4</sup>。

天は二物を与えずというが、万田さんは俳優としても素晴らしい。学生時代から8ミリ映画で演技されている姿を何度も拝見したが、実際に生で万田さんの演技を目の当たりにしたのは、青山真治監督の『冷たい血』が最初だ。万田さんが演じたのは、宗教団体の教祖の役で、マスコミ取材陣の目前で凶弾に倒れるのだが、脚本には、教祖の描写に「アルカイク・スマイル」と書かれていて、プロの俳優でもない人がこれをいったいどう表現するのだろうと現場に臨むと(私も報道陣役でエキストラ出演した)、まさにアルカイク・スマイルと形容するしかない微笑みを浮かべた万田さんがいた。その後、段取りで動きを確認し、何度かテ

3 『階級関係——カフカ「アメリカ」より』と改題され、DVD化。

4 万田さんの演出は所謂リアリズムには依拠していない。近年の万田さんの演出はさらに厳格であると同時に自由度をまし、ダンスの振り付けのようでもある。

ストを繰り返し、さらには本番テイクを重ねたが、万田さんは正確に、監督の望む演技を繰り返した。マイクやカメラの都合で撮り直し、仕切り直しをする間も、邪魔にならない場所で、気負う風情もなく、ひとりアルカイク・スマイルを浮かべながら、撃たれる動作を繰り返し自主練習していて、それはちょっと感動的な眺めだった。

私も後年、自分の監督作『怪談新耳袋』や『天国のスープ』に万田さんに出演をお願いした。後者では、今もときめく田中圭の上司役を演じてもらい、あの人、本職は監督ですよ、と伝えると俳優陣が驚いていた。

監督としても俳優としても抜きこんでいる万田さんだが、文章力もすごい。どうすごいかは、万田さんの著書『再履修 とっても恥ずかしセミナー』にあたっただければわかるはずなので、ここでは触れない。また、かつての蓮實重彦さんの講義がそうだったように、話もべらぼうに面白い。私は何度か万田さんにも気づかれぬように、万田さんの授業に潜ったことがあるのだが、いたずらに難解なところは全くなく、あくまでも具体的に映画の場面に即して、明快な言葉で語られる。明快であると同時に示唆的で、発見があり、自分が映画を見ているつもりで見落としたことに気づかせてくれる。知っているつもりだった映画の、別の相貌が立ち現れる。

教室でも酒席でも、万田さんの話は面白く、なによりブレがない。人によって態度を変えない。偉い人の前でも、学生の前でも同じだ。知人の映画監督や映画批評家たちと時々冗談まじりに話すのだが、世の中にはどうもエクリチュール反比例の法則というヤツがあって、「人生の尊さ」とか「人間の優しさ」を歌い上げるような映画を撮る監督に限って酒癖が悪かったり、スタッフにパワハラのようなことをしがちで、むしろ、死屍累々のような映画を撮っている監督の方が会ってみると常識人で、心遣いが細やかだったりするということだ。万田さんのつくる映画は、うわべだけのヒューマニズムを退ける厳しい映画が多いが、当の万田さんは押しつけがましきのない「兄」のようなひとだと思う。たいがいのことに冷静で、声を荒げるのを見たこともない。出しゃばらないが、必要なことは言う。なんというか、もうこれはトータルに、存在自体に説得力があるといかない方がない。そこに万田さんがいて、アルカイク・スマイルとは言わないが、目が合った時に笑ってくれたら、それだけで安心、大丈夫という心持ちになる。

映像身体学科設立から15年。最初から学科に携わっているのは、田崎先生と万田さんと私のみ。その万田さんが退官される。来年度から学科会議や教授会の席に、万田さんがいらっしゃらないことを想像することが出来ない。

私自身、池袋キャンパスで兼任講師から始めて、立教大学に教員という形で関わり、22年目が過ぎようとしている。大学という場において、未だ「アウェー」で、「異邦人」に過ぎない自分を自覚せざるを得ないこともあるが、それでもどうにかやってこられたのは、万田さんの存在が途轍もなく大きかった。つくづくそう思う。

万田さん、本当にありがとうございました。ふつつかな後輩ですが、これからもどうかよろしく申し上げます。